学校は
だれの場所？

札幌アーティスト・イン・スクール事業
おとどけアート 2017 記録集

発行：おとどけアート実行委員会／企画・編集：一般社団法人 AIS プランニング

はじめに

おとどけアートは、2008 年度から「第二次札幌新まちづくり計画」（2011 年度からは「第三次札幌新まちづくり計画」）の一部として、おとどけアート実行委員会の運営によりスタートし、今年度で 10 年目を迎えました。

私たちは、アートがあらゆる媒体を通して、多様な価値観や生き方を人や社会に提供すること、またアーティストの活動や作品が人と人、人と環境を結びつける可能性を秘めていることに注目し様々な活動を展開してきました。

おとどけアートは“いつもの学校”に、ある日突然アーティストがやってきます。学校でのアーティストとの出会いは、子どもたちにとって美術館や劇場で芸術鑑賞することとは異なる時間・空間を体験をもたらします。芸術をより身近に感じるだけではなく、ものの見方や考え方にゆさぶりをかけ、学年・学級を超えたコミュニケーションが生まれ、子ども自身がもつ創造性や可能性を引き出すことが期待されます。

実施校は、昨年度から公募により決定することとし、今年度は 3 校で活動を展開しました。

実施した拓北小・有明小・山の手小の 3 校は地域環境・歴史、学校目標や教育活動の特色はそれぞれ異なりますが、派遣されたアーティストは学校や地域がもつ環境や子どもに対する夢や期待を理解し、そこでの可能性を追求することに努めました。限られた開催期間ではありますが、3校の特色とアーティストの持ち味が活かされた活動を展開することができ、この度その様子を報告書としてまとめました。

2017 年度の活動報告書の発行にあたり、ご協力をいただいた学校の教職員、アーティスト、そして本事業の運営に携わる関係者の皆様に心より感謝申し上げますとともに、これからも私たちは“いつもの学校”の中で子どもとアーティストの出会いの場をつくり、子どもたちの新たな価値観や学びが生まれることを願い活動を進めてまいります。

おとどけアート実行委員会 実行委員長 池田 悦子

おとどけアートとは?

本事業は、アーティストが一定期間(数週間から数ヶ月)学校に通い、空き教室などの学校の余剰空間をアトリエとして活用しながら創作活動を行う「アーティスト・イン・スクール」の仕組みを活用し、アーティストが子どもたちや先生、地域の方々と学校という場を介して出会い交流する事業として、2008年から札幌市内の小学校を対象にスタートしました。
様々なアーティストの表現や価値観、生き方に触れることが、学校や地域の日常に普段とは異なる視点をもたらし、今までにない他者との関わりを育む学校そのものの場の可能性について考えるきっかけになることを目指して活動を展開しています。
活動ブログ ： https://inschool.exblog.jp/

おとどけアート実行委員会について

2008年設立。会員数12名。美術教育や社会教育の研究者(北海道大学など)や、市内小学校教職員、文化団体職員、アーティスト、学生などの市民で構成。おとどけアートの活動を通じて子ども達が豊かな感性と多様性を学び、地域の人々とのつながりを活性化、促進することを目指しています。

おとどけアート運営事務局について

おとどけアート事業の事務局として活動のコーディネートを担う一般社団法人AISプランニングは、学校、文化施設、商店街、公園など生活に身近な場所に注目し、アートを媒介として、人々の新たな関係性が構築されていくきっかけを生み出す取り組みを展開しています。北海道内におけるアーティスト・イン・スクール事業の運営をはじめ、アーティストと子どもに関する全国各地の取り組みを紹介する「アーティスト×こども」サイトの運営や、アーティストの活動を支える文化施設の管理運営なども行っている団体です。
一般社団法人AISプランニングHP ： http://ais-p.jp/

札幌市立拓北小学校 × まるみデパート

□活動内容：

小学校がある拓北地区について、地域の方や子どもたちに話を聞き、その情報をもとにフィールドワークを行いました。アーティストは、自らの足で子どもたちがどこから通っているのか校区を把握し、拓北地区に公園がたくさんあることや、地域の資源となるお店、場所、植生などを探りました。発見した物事を、白い大きな地図兼テーブルにディスプレイし、人々が集う「拓北デパート」を展開しました。大人には学校近隣のカフェで入手した珈琲豆で淹れたコーヒーを振る舞うなどして、テーブルを囲い、教職員・保護者・子ども達の話し声や笑い声が響くスペースとなりました。

□開催場所　札幌市立拓北小学校
□開催期間　2017 年 10 月 25 日（水）～ 11 月 8 日（水）
□参加人数　児童数 417 名、教職員 25 名、保護者・地域住民 30 名　計 472 名
□活動場所　札幌市立拓北小学校内 多目的ホール、拓北地区 など

まるみデパート（梶高慎輔・梶高果代／ Kajitaka Shinsuke・Kajitaka Kayo）

梶高慎輔と梶高果代によるアートユニット。
2012 年 尾道市御調町に複合スペース「まるみデパート」をオープン。そこを拠点に町づくり活動を行う。2010 年香川県観音寺市においてアーティスト･イン･スクールに参加。また、同市において 2011 年夜のまち歩き「よるしるべ」を企画し、その後 6 年間活動を展開する。
HP：http://marumidept.jp/

活動レポート

まるみデパートのふたりは、広島県尾道市は御調（みつぎ）という町からやってきました。尾道というと海や島を想像しますが、御調は尾道の中心部から車で30分ほどのところにある、山に囲まれた地域です。御調はまるみデパートのひとり、梶高慎輔さんの生まれ育った町です。東京で進学・就職したのち、御調にUターンし、いわゆる「まちおこし」の活動を行っています。この活動について、おとどけアート期間中に見学に来た大学生には「まちを“盛り上げる”というけれど、盛り上げると必ず盛り下がるから盛り上げない」、「非日常的なことをがんばるのではなくて、当たり前の暮らしを大切にすることが大事」とお話しされていたのが印象的でした。まるみデパートのもうひとり、梶高果代さんも生まれは広島県福山市、上京ののち、御調へやってきました。彼女はアロマオイルを使って香りを作り出す「香り作家」で、なおかつ植物がすきということもあり、今回特に植物のディスプレイでは彼女のセンスがカギを握っていたように思います。

2016年に縁あって、御調に行く機会がありました。それまで私の中でふわふわとしていた「まちおこし」という言葉が、御調に来て腑に落ちた経験があります。ふたりが町のひとと話をし、野山を歩いては植物に目を配り、それらを大事な資源だと考え、改めて町に住むひとたちに再提示していたからだと思います。一度東京に出たからこそわかる、町のよさもあったのかもしれません。野山でヨモギを摘んではお茶を作ったり、桜を採取して塩漬けにしたり、その生活は札幌で生まれ育った私には目からうろこが出るようなものでした。

そんなふたりが拓北地区にやってくることを知り、何をしていくのか、とても楽しみでした。小学校でやっていたことは御調でやっていることと同じことのように思います。地域について、地元のひとの話に耳を傾け、自らの足で歩き、土地勘も含めて丁寧に把握していく。そして、そこで暮らしているひとたちにこのまちのよさ・資源を再提示する方法を考える。間近で活動を見ていて、見せ方もひと手間かければ見違えていくことがよくわかりました。ふたりが子どもたち、そして教職員や保護者のみなさんに見せたのは、「まちをすきになる方法」であり、まちの「見方」、そして「見せ方」だったと思います。自分の住む地域に何もないと思っていても、“外部のひと”が見れば、この地域にしかない資源が必ずある。そして、見せ方によって価値が増幅していくのです。子どもたちにとっても、今は行動範囲が狭く、すぐにわからなくても、これから成長し、違う土地に暮らしたり、旅行へ赴けば、自分の住む地域のことが逆にわかってくるでしょう。そして、このふたりのこともしかすると思い出すかもしれません。まちに資源があることがわかるということは、「今ある日常は決してつまらないものではない」ことを教えてくれたように思います。かと言って、ふたりに積極的に教える姿勢があったかというと、そういうわけではありません。ふたりはただただ、楽しんでいるように見えました。御調からやってきても、あくまで日常を貫いているようでした。

おとどけアートはアーティストと学校関係者・子どもたち双方に種を蒔く活動のように思います。小学校という「場所」や「環境」を知らないひとがやってきて、その場で活動をしていくということは、「自分は与えられた場所・環境を、こう見た・感じた」ということの一つの現れであり、学校関係者や子どもたちはそれを受け取り、「ここってこういう場所なんだ」ということを感じる。それは一時的なことで、アーティストが去った後には忘れられることなのかもしれません。けれど、学校関係者や子どもたちはあるときふと「おもしろかったなあ」とか、「あのひとが言いたかったことってこういうことかも」、「そういえばあんなことしてたな」と思い出す。アーティストも「子どもたちがあんな反応をしてたな・あんなこと言ってたな」と思い出す。えてして、どんな出会いもそうなのかもしれないけれど、互いに互いの種を蒔いて、その種がいつか芽吹いて、今後何かのきっかけで、それぞれの生活に小さくても変化が現れるかもしれないと思いました。そんな日を楽しみに、また「当たり前の日常を大切に」しながら、暮らしていくのでしょう。

拓北小学校担当コーディネーター 中脇まりや

札幌市立有明小学校 × 東海林靖志

□活動内容：

“ 未来 ” について子どもたちに思い思いに書いてもらったアンケートを手がかりに、新たな踊りを 創作しながら、子どもたちや先生と交流しました。創作活動は主に休み時間を活用し、手足に絵の具をつけ大きな 紙の上で身体を動かし全身で絵を描くことを繰り返し行いました。最終日の朝会には、描いた絵を体育館一面に広げ舞台にし、子どもたちや先生方との交流 を深める中で得た体験や思いから生み出された踊りを馬頭琴奏者の嵯峨治彦さんの演奏に合わせて披露しました。

□開催場所　札幌市立有明小学校
□開催期間　2017 年 11 月 17 日（金）～ 12 月 1 日（金）
□参加人数　児童数 96 名、教職員 19 名、保護者・地域住民約 30 名　計 145 名
□活動場所　札幌市立有明小学校内 体育館など

東海林靖志（Shoji Yasushi ／舞踊家）

HIPHOP との出会いにより、ダンスに興味を持ち 15 歳から踊り始める。その後コンテンポラリーダンス、舞踏に影響を受け、独自の身体表現 を模索し始める。国内外で公演活動を行うほか、北海道を拠点にダンス・演劇作品 への振付や出演、異分野アーティストとの創作や即興パフォーマンス、様々な対象に向けたワークショップも行っている。
HP：https://yasushi-shoji.com

活動レポート

おとどけアートは非日常なのだろうか。おとどけアートが始まると小学校は、東海林さんにとっては普段いない場所で創作活動という日常を、子どもと先生にとっては普段いない人がいながら日常を過ごす場所になる。もちろん一緒に給食を食べたり遊んだり、世間話をしたり、休み時間にやってくる子どもたちと何かをしたりする。この2週間が大なり小なり子どもと先生達、そしてアーティストの東海林さんにとってワクワクや驚き、新しい気づきが起こり、対話や変化が生まれたりする特別な時間であるのは間違いない。しかしとんでもなく非日常なわけではない。上手く言えないがそれはアーティストの日常と子ども達、先生達の日常という川の流れが小学校という場所で合流して渦や波が起き流れていった…そんな瞬間だったように感じる。

有明小学校でどんな活動をするのか、東海林さんのテーマは「みらいをおどる」というものだった。子どもたちの想像力を借り、“未来ってどんなものだろう?”という問いかけに言葉や絵で答えてもらい、それを元に東海林さんの中で再構築して踊りを作る。また子どもたちと身体を自由に動かし踊りを描くという初の試みをしてみたいという。有明の子どもたちへアプローチしていくことにしたのだ。そしてこの初の挑戦は「今作っている作品は踊りなのか、絵なのか」「踊りと動きの境界はどこにあるのだろう」という問いを東海林さんと私に投げかけてきた。

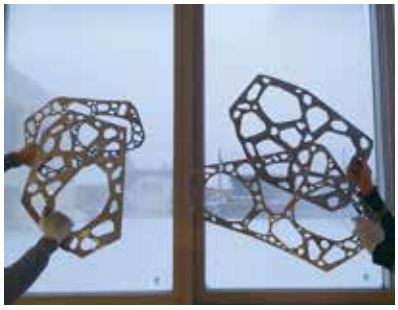
朝は東海林さんの日課であるヨガから始まり、授業の間は作戦会議と準備、子どもたちから集めた“未来”の答えを眺め、休み時間10分前になると台車に絵の具やカッパを乗せて移動し体育館の一角におよそ4メートル四方の紙を広げて子どもたちを待ち構えた。チャイムと共に押し寄せてくる子どもたちにカッパを着せると手足に絵の具をつけ紙の上に飛び込み、東海林さんも紙の上で子どもたちの動きを観察しながら一緒に踊った。最終日5日前、はっきりとした答えを見つけられず、また「みらいをおどる」にも頭を悩ませていたところ、先生から「各クラスの授業の時間を使って子ども達みんなに体験させられないか」という提案がやってきたのだ。そこからは霧が晴れていくような変化が起きた。子どもたちの動き一つ一つが東海林さんと掛け合い、連続し立ち上がり踊りに変化していった。東海林さんは、「紙の上で対峙したときに、目を合わせたり動いたりして気持ちを開くか、それとも閉じるかが、踊りになるか、絵を描くかの境界線なのかもしれない」という手応えを持った。そして「“未来”は踊らない。みんなが踊って描いた線から、その時感じるものを即興で踊りたくなった」と迷いを振り切った。そして最終日の即興の舞台は、馬頭琴奏者の嵯峨さんの演奏に合わせ東海林さんが踊った。東海林さん1人が踊っているのだがその動き、その空気、時間は紛れもなく子どもたちとの絆が作り出したものだった。

「普段はダンスを作り舞台で発表するという輪(サイクル)。それが有明小学校では間に子どもと先生達がいて輪が大きくなった。」東海林さんに感想を聞くとそう返ってきた。具体的なことは分からないが、廊下や給食、紙の上で接する中で何かを作っては分解し再構築するという過程が生まれていたのだろう。子どもたち、先生達にとって東海林靖志という人はどんな存在になったのか。それは今すぐに分かるものではないが、その瞬間でしか見ることのできない踊りという表現が紙の上で色として現れ絵になり、その色が東海林さんによって再び踊りとして立ち上げられたように、未来にこの体験と記憶が湧き上がってくることがあればと思う。

最終日の終わりに合流した川はまた分かれるのだが一度混じり合った川は合流する前とは少し違っていると思う。下校する子どもたちと「夏のクロスカントリー走でまた会おう」と手を振り合った。

有明小学校担当コーディネーター 鈴木 萌

札幌市立山の手小学校 × 川上りえ



□活動内容：

図工室に金属の板を材料に研磨や溶接といった作業を行う工場「山の手すぐできる工場」を建てて作品制作を行いました。特に溶接の作業は強烈な光が発生するため、作業の様子を直接見ることがないように遮光ガラスを用いて手作りの溶接マスクを準備するなど、子どもたちのアイデアを取り入れながら作品ができあがるまでの一連の過程を共有しました。同時に、子どもたちが削ってピカピカに磨いたり、叩いて音を鳴らしたり金属という素材を楽しみながら活動が行われました。できあがった作品は活動が終了した後、廊下に一定期間展示をしました。

□開催場所　札幌市立山の手小学校
□開催期間　2017 年 12 月 1 日 (金)〜12 月 14 日 (木)
□参加人数　児童数 549 名、教職員 36 名、保護者・地域住民約 40 名　計 625 名
□活動場所　札幌市立山の手小学校内 図工室、廊下など

川上りえ（Kawakami Rie ／美術家)

1989 年東京藝術大学大学院修了。現在、石狩市に在住。個展、グループ展を通して彫刻、インスタレーション、インタラクティブ・ワークという形で作品の製作発表を行う。2002 年以降からは、アメリカや韓国でのアーティスト・イン・レジデンス・プログラムや展覧会を通して、海外での活動も維持しつつ、札幌を中心に活動中。2012 年札幌文化奨励賞受賞。

HP：http://reicreatesart.wix.com/riekawa

活動レポート

山の手小学校でのおとどけアートは、過去に行ってきたおとどけアートと少し異なった部分があった。それは、滞在するアーティストに“モノ"としての作品を実直に製作しているいわゆる作家タイプのアーティストを選定したことである。これまでは、滞在開始後に学校の中から作品となりえたり再発見や気づきを与える要素を探したりする、サイトスペシフィック・アートのような活動であることが多く、普段からそういった作品やテーマ性でもって活動している人物をアーティストとして選定することが多かった。しかし、今回のアーティストは金属を扱った作品を主に金属同士の溶接や溶断、研磨などの技術を用いて製作している。特に活動の内容自体に「溶接」という工程が入るため、はたして学校の中で溶接ができるのか?という前提をクリアする必要があり、事前に小学校との確認などの回数が増えていき、おとどけアートで初めて、小学校の先生がアーティストの製作アトリエを訪れるという機会を設けるにいたったのである。その後、学校での作業が可能かどうかの是非にとどまらず、こういったことが授業に取り入れることができるのではないか、といった要素を先生が持ち帰ったことで、アーティストが小学校での滞在をする前からアーティストの過去作が実際の授業の教材で扱われたりということが起こった。また、滞在の2日目には持ち込んだ作品素材の一部がとある学年の授業の教材として取り上げられた。

活動開始2日目に授業と関わる。これも過去のおとどけアートではあまり見られないものであった。授業計画の中ではあるが、素材が一体何に見えるかという問いかけをしたことと、アーティストないし作品に触れるきっかけを活動初期に持ったことで、以降の休み時間での活動に積極的に参加しにくる子どもも何人か見受けられ、子どもたちはもちろん、子どもの受け取め方、アーティストとの距離感を第3者が客観的に捉えられる環境を作り出しただけでなく、より豊かなアイデアや発見をアーティストや活動自体にもたらしてくれたのではないだろうか。

これまでに多かったサイトスペシフィックタイプの活動をするアーティストであったならば、開始してすぐは学校の内部や周辺をリサーチすることが多く、それが子どもたちや教職員らにとって日常の中に再発見をもたらす場合があるのだが、自主的に興味をもって継続的に関わろうとしない限りそういった発見にたどり着かないことさえある。一方で、山の手小学校のおとどけアートでは、必然的に行う作業工程に対して判断を仰ぐ過程において、教職員とアーティストが関わることでの副産物として、活動開始直後に積極的な子どもたちや教職員との交流が生じたのである。

また、印象的だったのは、子ども、教職員問わずアーティストと1対1で話をするために、アーティストのもとを訪れるという場面が2週間という短い活動期間の中で度々見受けられたということである。それは、上記の滞在開始直後から交流に加え、それは、溶接作業中は安全確保のためにアーティストに近づくことができず、いわば限定的にしか触れ合えないという状況であったことも後押しとなったのかもしれないが、そこには学校で日常を過ごす個々人が、アーティストや今回の活動との関係性を考える、見つけられるようなきっかけとなったに違いない。話をした個々人がアーティストとの交流を通してその後どういう捉え方・考え方を持ち得たのか、観測していくことはできなかったが、きっとなんらかの形で個々人の中に残っていくものになるだろう。

学校という場所でありながら授業とは異なった時間の中で何かができる・起きる「おとどけアート」は、いってしまえば日常の中に非日常を持ち込んでいるとも言える。そして「日常」と「非日常」の関係性にも近いのかもしれない。日常があるから非日常が際立ち、また、非日常があるから日常の中に発見がある。特に日常性が強い学校という場所であるからこそより顕著に反応が起こることもある。今回の活動では、学校自体に地域の人々や外部団体との連携などを積極的に行っているという地盤があったこともあってか、変に身構えたりせず、子どもたちを通して活動の反応が素直に顕れやすい良い環境であったように思う。2週間という期間ではあったが、この活動を通して関わった方々が学校という場所の可能性を拡張するきっかけとなってくれたらと願っている。

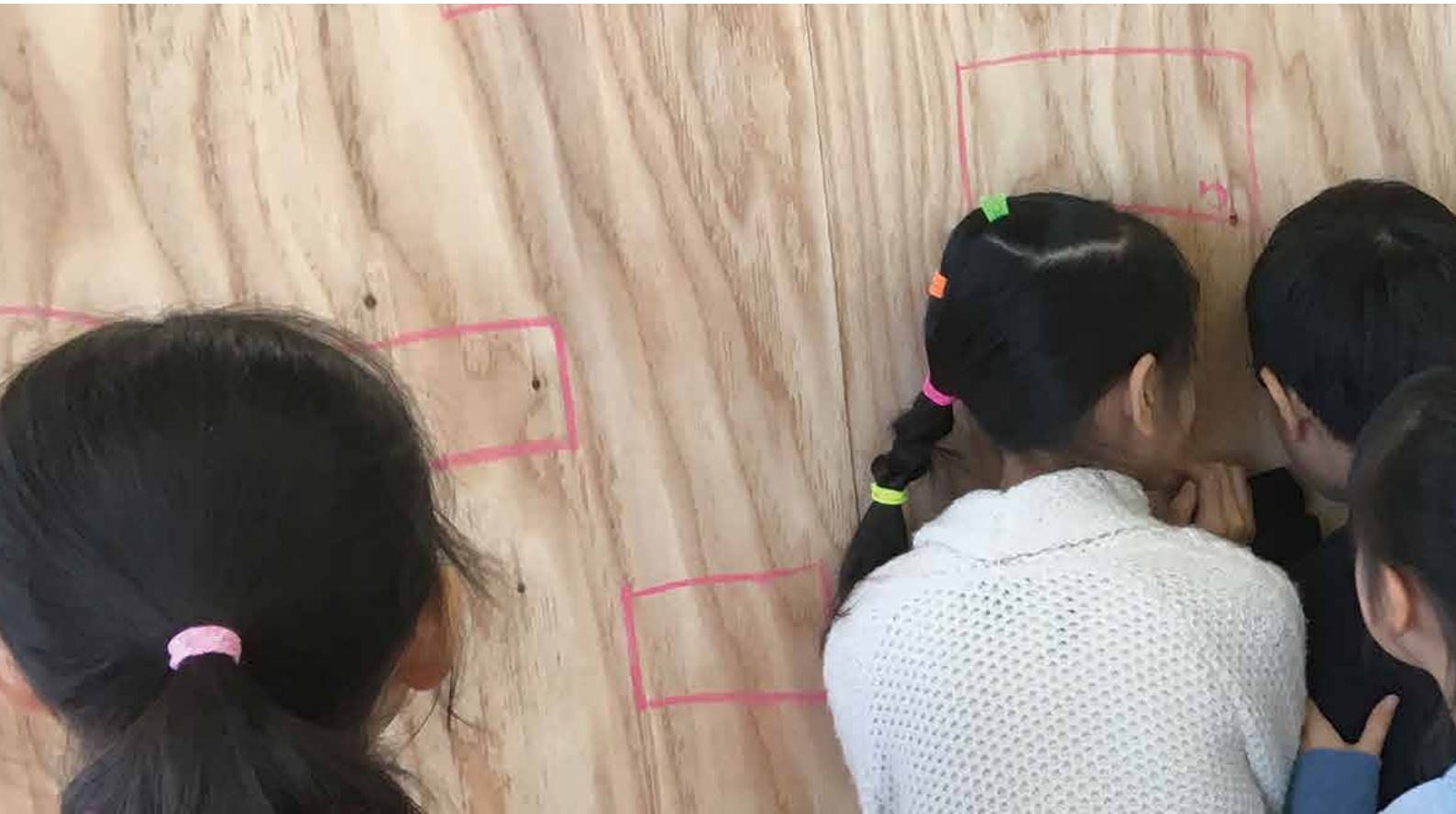
山の手小学校担当コーディネーター 杉本 直貴

おとどけアートのお話をいただいたとき、企画側から、制作する姿を子どもたちに見せる形で展開していくのがよいのではないか、という提案をいただいたことは、とてもうれしかった。そのシンプルなアプローチのスタイルが、私には最もしっくりくるものだったからだ。その時点で、私の頭の中には、グラインダーで激しい音を発し、眩しい火花を飛ばしながら鉄素材を溶接する場面が浮かび、それを子どもたちと共有したいと思った。

早速、山の手小学校に打診していただき、学校の先生方に、私のスタジオで作品制作の現場を見ていただいた。鉄粉だらけで殺伐としたスタジオに足を踏み入れ、溶接の体験に挑戦していただいくことで、アートコミュニケーション第一段階は、ここから始まったといえる。アートコミュニケーション第二段階は、プロジェクト準備を巡る企画側との取り組みのなかで展開された。溶接を実践するに当たり、図工室に安全確保のための作業空間を架設することになったが、作業空間の制作過程を含めてこそ本当の制作現場だという意見で一致して、日程の最初の2日間を場づくり作業に当てることになった。壁にのぞき穴を開けて、そこから私の作業を覗いてもらおう、溶接を近くで見るために厚紙や薄板で溶接面を工作してもらおう、作品パーツのやすり掛けを子どもたちにも体験してもらおう等、楽しいアクティビティのアイデアが沢山提案されていく。プランは子どもたちの予測不能なリアクションを踏まえて、固めすぎることなくゆったりと計画された。

そしていよいよおとどけアートが始まった。朝礼での告知も功を奏したらしく、休み時間になると子どもたちがわらわらとやってきて、興味津々に図工室の中を覗いていく。初日の図工室は、ただ材料や工具が床に置かれた状態だ。そこから始まることを子どもたちに見てもらった。二日目以降、図工室の一角に秘密基地のような仮設工房が完成し、子どもたちも大興奮だ。皆から募って決めた工房名は、「すぐできる工場」。私の作品パーツの副産物である鉄の破片を「すぐできる工場」という文字になるように配列し、廊下から見える看板を作った。そんな風に、スタッフによるアイデア満載の創作が次々と展開されていった。

一方、私は作品の制作に取りかからねばならなかった。作品は、鉄板に任意の穴を開けたパーツの形を沢山用意して、それをリズムカルに構成し、立体作品にしていく計画だ。どう組み立ててもよい余地を残し、最終的な状況に合わせて完成の形を決めることにしていた。溶接とグラインダー作業を「すぐできる工場」の中で行い、作品パーツを図工室の作業台に並べて、いつでも見学者に触れてもらえるようにした。



子どもたちが工作室にやってくるのは、基本的に休み時間だ。自発的に来てもらい、参加を強要することはない。熱心な先生が授業時間をつかって積極的にクラスの子どもたちと訪れ、作品パーツをつかって子どもたちにフロッタージュを体験させたり、思い思いに配置を楽しんでワンダーランドをつくってお話を発表させたり、アイデアに満ちた授業展開を見せてくれた。単独行動の多い上級学年の中では、意欲的に工房設営に参加してくれる子や、溶接面の自作に取り組むために休み時間を使って通ってくれる子がいた。上級生の会話は、とても大人っぽく聞こえたことが印象深い。

子どもたちの自発的な関わり方で興味深かったのは、くりぬいた鉄板とくりぬかれた鉄板の形あわせを誰かがやり出したことをきっかけに、皆がそれにつられて同じ行動をとったことだ。ネガとポジの形の一致が快感だったのか。時々起こる連鎖の行為に、集団心理の一片を見たような気がした。図工室を訪れる子どもたちには、壁ののぞき穴から、制作情景を見学してもらっていたが、状況が許す限り、壁の内側に入ってもらって直に溶接を見てもらうことを心がけた。この体験は、子ども心に特別なものとして留まったに違いない。

作品は、展示予定日の前日、ほぼぎりぎりで完成した。校舎の比較的広い空間での仮設展示によるお披露目で締めくくることが出来た。展示中は各クラスの子どもたちが代わる代わる作品を見に来てくれた。作品をジャングルジムに見立てて、紙で作った人形で遊んでくれるクラスや、作品を模した形に見立てたメッセージカードのオブジェ、メッセージ集など、いろいろな形で完成を祝福していただいた。最後まで、子どもたちのアートとの対話を積極的に促してくださった先生には、感謝の気持ちでいっぱいだ。

子どもたちの目には、作品の部材である鉄が、日常生活で触れる金属とは全く質の違うものとして映っていたようだ。見るだけではなく、手で触れて、音を聞いて、溶かし付ける火花に興奮し、一体これは何なのだろうという戸惑いと謎に、子どもたちは様々な形で挑んでくれた。このように、私たちが小学校におとどけするアートは、創造行程における、「面白い」「楽しい」発見を促す試みといえる。それは、たとえささやかであったとしても、確実に子どもたちの心にポジティブな思考、行動のエネルギーとして蓄積されていくと信じている。そのための場面に関わることができて、とても光栄に思っている。

札幌市立山の手小学校 参加アーティスト　川上 りえ

協力企画：さっぽろ天神山アートスタジオ主催 国際公募事業【s(k)now】コミュニティプログラム

札幌市立澄川南小学校 × ミッシェル・アンジェリカ・カビルド

□活動内容：

さっぽろ天神山アートスタジオの国際公募事業で招聘されたフィリピン出身のアーティスト、ミッシェル・アンジェリカ・カビルド（ミカ）さんが、同事業のプログラムの一環として約２週間小学校に通い、砂と氷をテーマにした創作活動を行いました。活動は主に図工室で行い、彼女が事前に行った氷の結晶生成や滑り止め材に関する調査をもとに考えたワークショップを実施しました。子どもたちとも積極的に交流を行い、最終的には小学校の中庭に「噴水」という名前の新しい庭を作り出しました。

□開催場所　札幌市立澄川南小学校
□開催期間　2018 年 1 月 22 日（月）、25 日（木）、2 月 1 日（木）～ 2 月 13 日（火）
□参加人数　児童数 356 名、教職員 29 名、保護者・地域住民約 15 名　計 400 名
□活動場所　札幌市立澄川南小学校内 図工室、中庭など

ミッシェル・アンジェリカ・カビルド（Michelle Angelica Cabildo ／アーティスト）

フィリピンの首都マニラを拠点にデザインを学んだのち、アートとデザイン、２つの分野を往来しながら制作活動を行う。「海岸沿いに砂が延々と続くフィリピン」と「雪と氷が尽きることのない冬の北海道」この２つの場所をつなぐ存在として、雪国の「砂」の利用方法（滑り止め材）に興味を持ち、札幌でのプロジェクトプランを作成した。
HP：http://www.mica-cabildo.com

活動レポート

山の手小学校、澄川南小学校の活動を通して

「交流」

交流とは何なのか。辞書では「異なる地域・組織・系統に属する人や文物（学問・芸術・宗教・法律・制度など文化に関するもの）が互いに行き来すること」とある。当活動を説明する際によく使う文言が、「アーティストが創作活動を通じて子どもたちと交流を行います」である。ここでいう、交流は何を指しているのか。

山の手小学校の活動中に、子どもたちが鉄を削る様子を見て、川上さんは「どのように鉄に接しているかで、子どもたちの性格や気持ちが分かる」といった。また最終日に川上さんが設置した作品を、ただじっと見つめその場を動かない子がいた。それがとても印象に残った。なぜなら、コーディネーターにとってただ夢中に鉄を削る子どもの姿が、アーティストにとっては子どもとの会話になっていたし、子どもは川上さんから作品を通じて確実に何かを受け取っていたようだった。このふたつの経験から実感したのは、アーティストと子どもの間にはコーディネーターにも気づかないような情報のやりとりがあり、文字通り「交流」が成立しているということだった。言葉によるコミュニケーション以上に、この場には目に見えない、感覚的な情報のやり取りが大量に行われており、そう考えると、遠目から見つめているだけの子であっても、黙って手を動かしているだけの子であっても、しっかりと彼らは何かを受け取り、同時にアーティストも彼らから多くを受け取っているのだと実感した。

「視点」

澄川南小学校の活動では中庭に作品を制作した。開校から30年以上が経ち、これまでひっそりと佇んでいた中庭がプロジェクトと共に脚光を浴びることとなった。当活動を知った卒業生から「中庭は覗くだけだったから子どもたちが羨ましい！」といった声があった。アーティストが持ち込んだ視点によって既存の認識が変化し、新たな役割が生まれる。※これまでも同じような事例があり、みどり小学校（2012/山本耕一郎）ではグラウンドと校舎の間に設置された並木道が冬の温泉郷になり、三里塚小学校（2013/加賀城匡貴）、北陽小学校（2014/加賀城匡貴）は校舎の設備や壁の模様などが美術作品となった。

このように、アーティストは新たな見方を提示し、既存の姿を変化させるような力がある。それは施設だけではなく、人にも当てはまる。創作活動を通じ、参加する人は新たな役割を担い、これまでとは異なる人間関係を構築していく。クラスであまり目立たないような子が活動の中心を担うことも多々あり、子どもたちの新たな側面を映しだすきっかけにもなっている。アーティストは日常を再認識する新たな方法を小学校に持ち込み、創作活動を通じて人と場と出会い、アートという名の「可能性」を生み出すのだ。

山の手小学校・澄川南小学校担当コーディネーター 小林亮太郎

学校はだれの場所？

2008年に札幌市の小学校を対象とした「おとどけアート」が始まって10年が経過した（前身となる「トヨタ・子どもとアーティストの出会い事業（2006年～2007年）」や、北海道十勝地方での「十勝アーティスト・イン・スクール事業（2004年～2010年）」も含めると札幌での活動は12年、北海道では実に14年が経過したことになる）。

ここでその10年間を少々振り返ってみたい。

札幌での活動は、当時214校あった小学校に意識調査を行うことからスタートした。活動実績も経験値も乏しい状態の中で、その後の事業の進め方においての可能性を探ることが重要だと考えていたからだ。

結果、ポジティブなリアクションは皆無に等しかった。

アーティストが、講師や先生という所謂教育者、指導者という立場ではなく、アーティストとして学校に存在することにイメージが持ちにくいと想定していたが、そもそも外部の人間が学校に関わろうとすることに大半の学校が拒否反応を示したことにはいささか戸惑いを覚えたことはまだ記憶に新しい。

しかしながらおとどけアートは、そうした学校現場からの期待感もニーズもない状況の中で前途多難な船出であったにもかかわらず、現状の学校教育に新たな風を送り込む必要があると感じた一部の教職員の方々、新たな表現の場や活路を見出そうとするアーティスト、そしてアーティストの存在を柔軟に受け入れ反応する子どもたちの存在を原動力に活動を続けてきた。

アーティストが展開した活動がその後も学校を取り巻く地域の伝統行事になった事例もあれば、特定の先生との関係性や繋がりを軸に、同じ学校で数年間にわたって活動を実施した事例もある。周年行事に華を添えた活動もあれば、学校が抱える問題の解決に一役買ったこともある。逆に、現場との摩擦を起こしたことも一度や二度ではない。実績を重ね活動の周知に努めた開始当初の数年間から、地域への広がりやより充実度の高いプログラムの構築と提案に勤しんだ時期を経て、コーディネートのあり方や活動の意義について捉え直しを図り、気がづけば10年が経過していた。

さて、この10年という期間の中で様々な現場で垣間見た状況から、今後の活動を占う意味で改めて「学校」という場で活動する意義を捉え直してみたいと考えている。なぜ私たちは小学校という場にこだわりこの活動を続けてきたのか。

無論学校は、子どもたちの学び舎であることは間違いない。制度的な位置付けにおいても、一般常識的にも「子ども」のための場所である。そこに学校の存在意義があることは信じて疑わないわけだが、ただ、かつてそうだったかも含めて、未来において学校は子どもたちに限定された場所でいいのだろうか。

現状の制度は、子どもたちを現実社会から遠ざけ、隔離しているようにも感じることがある。私たちが活動を始めた当初やその少し前から学校と社会との距離が拡がっていることは間違いない。社会に適応する人材の育成という教育目標を掲げる学校もあったが、社会に適応する人材が良いかどうかという議論はさておき、そもそも社会との接触を拒む現状と教育目標のギャップにはいささか矛盾を感じたことは事実である。一方で、時代の要請に対応していかなくてはならない教職員の方々の苦労やストレスを考えると、学校単体で大きな変革をもたらすことは容易ではない。

そうした背景の中でおとどけアートは、子どもを中心とする学校関係者とそれ以外の存在との今までにない新たな交流を促すことで、学校が多様な社会活動を受け入れる場として機能することの可能性を模索してきた。言い換えれば、第三者の受け皿となる新たな学校像の提示である。

アーティストと子どもたちが出会うことの意義は、価値の定まらない不確かでリアルな社会との遭遇であり、すぐには消化できない心の揺さぶりや衝動を体感することに他ならない。それは、あくまでも既存の制度に取り込まれることなくアーティストがアーティストとして学校に存在することによってはじめて可能となり、学校の新たな存在意義を示唆することにもつながると私は考えている。とどのつまり、おとどけアートは、社会と断絶しつつある現代の子どもたちが現実社会と接触する数少ないチャンスであり、だからこそ小学校で活動を行う意義があるのだ。

次の10年後にどのような未来が待っているのか正直定かではないが、この種の活動がきっかけとなり、アーティストをはじめとする現在進行形の多様な社会の接点として学校が機能していることを期待し、今後も活動を続けていきたい。

おとどけアート実行委員会事務局
一般社団法人AISプランニング 代表理事 漆 崇博

クローバー
+1
ピザ屋
くろと白の
家
細野
赤と白の家
セブン
イレブン
青くてトンガ
がかわいい
のおうち
栄ちゃ

おとどけアート & 関連事業実績

主催及び関係事業一覧
- 十勝アーティスト・イン・スクール事業
- おとどけアート事業
- (財) 北海道文化財団 " 文化の宅配便 " 事業
- トヨタ・子どもとアーティストの出会い事業
- 札幌アーティスト・イン・スクール事業
- (財) 北海道文化財団 " アート体感教室 " 事業

札幌市内の活動

2006 年 10 月 2 日 (月)〜10 月 6 日 (金)・14 日 (土)
札幌市立清田小学校 × 加賀城 匡貴 (ステージパフォーマー)

2007 年 1 月 22 日 (月)〜2 月 2 日 (金)
札幌市立山の手南小学校 × 野上 裕之 (彫刻家)

2007 年 2 月 5 日 (月)〜2 月 16 日 (金)
札幌市立有明小学校 × 石川 直樹 (写真家)

2007 年 11 月 26 日 (月)〜12 月 7 日 (金)
札幌市立新陵東小学校 × 宝音 & 図布 (版画家)

2008 年 2 月 4 日 (月)〜2 月 15 日 (金)
札幌市立新光小学校 × 河田 雅文 (美術家)

2008 年 11 月 10 日 (月)〜11 月 21 日 (金)
札幌市立太平小学校 × 高橋 喜代史 (美術家)

2009 年 1 月 26 日 (月)〜2 月 6 日 (金)
札幌市立幌西小学校 × ルカ ローマ (彫刻家)

2009 年 11 月 4 日 (水)〜11 月 13 日 (金)
札幌市立屯田南小学校 × 今村 育子 (現代美術家)

2010 年 2 月 8 日 (月)〜2 月 24 日 (水)
札幌市立北小学校 × 東方 悠平 (現代美術家)

2010 年 10 月 12 日 (火)〜12 月 3 日 (金)
札幌市立清田小学校 × 長谷川 仁 (美術家)

2010 年 11 月 8 日 (月)〜11 月 19 日 (金)
札幌市立福住小学校 × 斉藤 幹男 (彫刻家)

2011 年 1 月 19 日 (月)〜2 月 4 日 (金)
札幌市立常盤小学校 × 富士 翔太朗 (画家)

2011 年 2 月 7 日 (月)〜2 月 19 日 (土)
札幌市立旭小学校 × 片岡 翔 (映画監督)

2011 年 9 月 26 日 (月)〜10 月 15 日 (金)
札幌市立稲積小学校 × 小助川 裕康 (美術家・庭師)

2011 年 11 月 28 日 (月)〜12 月 16 日 (金)
札幌市立あいの里西小学校 × 冨田 哲司 (現代美術家)

2012 年 1 月 17 日 (火)〜2 月 3 日 (金)
札幌市立みどり小学校 × 山本 耕一郎 (現代美術家)

2012 年 8 月 20 日 (月)〜9 月 6 日 (木)
札幌市立石山東小学校 × トムスマ・オルタナティブ (現代美術家

2012 年 10 月 1 日 (月)〜10 月 13 日 (土)
札幌市立富丘小学校 × 本田 蒼風 (アート書家)

2013 年 2 月 1 日 (金)〜2 月 15 日 (金)
札幌市立もみじの森小学校 ×
小川 智彦 (ランドスケープアーティスト)

2013 年 8 月 20 日 (火)〜10 月 4 日 (木)
札幌市立資生館小学校 × アサダワタル (日常編集家)

2013 年 9 月 1 日 (日)〜12 月 24 日 (火)
札幌市立北陽小学校 × 佐藤 隆之 (芸術家)

2013 年 10 月 1 日 (火)〜10 月 12 日 (土)
札幌市立三里塚小学校 × 加賀城 匡貴 (ステージパフォーマー)

2014 年 2 月 10 日 (月)〜2 月 21 日 (金)
札幌市立北陽小学校 × 風間 天心 (芸術家 / 僧侶)

2014 年 8 月 20 日 (水)〜12 月 6 日 (土)
札幌市立北陽小学校 × 加賀城 匡貴 (ステージパフォーマー)

2014 年 9 月 16 日 (火)〜9 月 26 日 (金)
札幌市立元町小学校 × ダムダンライ (芸術家)

2014 年 11 月 4 日 (火)〜11 月 15 日 (土)
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則 (行為情報体)

2015 年 2 月 9 日 (月)〜2 月 20 日 (金)
札幌市立山鼻小学校 × 持田 敦子 (芸術家)

2015 年 9 月 1 日 (火)〜11 日 (金)、2016 年 2 月 23 日 (火)〜26 日 (金)
札幌市立星置東小学校 × 永田 壮一郎 (音楽家)

2015 年 11 月 2 日 (月)〜2016 年 2 月 18 日 (木)
札幌市立栄東小学校 × 小町谷 圭 (メディアアーティスト)

2016 年 1 月 19 日 (日)〜2 月 13 日 (土)
札幌市立平岸高台小学校 × 黒田 大祐 (美術家)

2015 年 6 月 18 日 (木)〜12 月 24 日 (木)
札幌市立北陽小学校 × halle(アーティストグループ)

2015 年 10 月 21 日 (水)〜2016 年 2 月 26 日 (金)
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則 (行為情報体)

2016 年 10 月 3 日 (月)〜10 月 22 日 (土)
札幌市立鴻城小学校 × 山崎 阿弥 (声のアーティスト)

2016 年 12 月 6 日 (火)〜12 月 16 日 (金)
札幌市立西岡小学校 × 深澤 孝史 (美術家)

2017 年 1 月 23 日 (月)〜2 月 17 日 (金)
札幌市立苗穂小学校 × 進藤 冬華 (美術家)

2016 年 11 月 22 日 (月)〜12 月 2 日 (金)
札幌市立月寒東小学校 × 長谷川 仁 (美術家)

2016 年 4 月 27 日 (水)〜2017 年 3 月 24 日 (金)
札幌市立藻岩小学校 × 藤木 正則 (行為情報体)

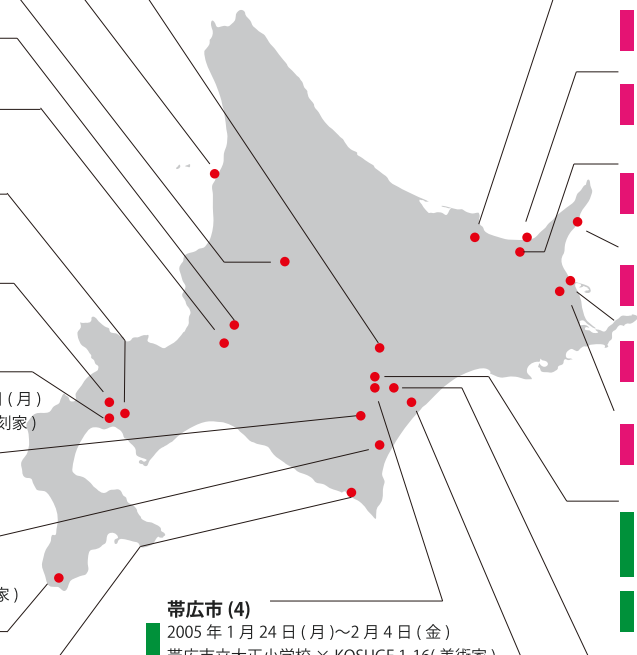
2017 年 10 月 24 日 (火)〜11 月 8 日 (水)
札幌市立拓北小学校 ×
まるみデパート / 梶高慎輔、梶高果代 (アートユニット)

2017 年 11 月 17 日 (水)〜12 月 1 日 (金)
札幌市立有明小学校 × 東海林 靖志 (舞踊家)

2017 年 12 月 1 日 (金)〜12 月 14 日 (木)
札幌市立山の手小学校 × 川上 りえ (美術家)

2018 年 1 月 22 日 (月)、25 日 (木)、2 月 1 日 (木)〜13 日 (火)
札幌市立澄川南小学校 ×
ミッシェル・アンジェリカ・カビルド (アーティスト)

札幌市外の活動



羽幌町 (1)
2009 年 6 月 30 日 (火)〜7 月 1 日 (水)
羽幌町立天売小・中学校 × 石川 直樹 (写真家)

旭川市 (1)
2017 年 12 月 16 日 (土)、17 日 (日)
旭川市民文化会館 × 石川 直樹 (写真家)

美唄市 (1)
2012 年 8 月 16 日 (木)〜8 月 17 日 (金)
アルテピアッツァ美唄 × 石川 直樹 (写真家)

岩見沢市 (1)
2012 年 10 月 13 日 (土)〜10 月 14 日 (日)
岩見沢駅構内 × 長谷川 仁 (美術家)

真狩村 (1)
2012 年 1 月 12 日 (木)〜13 日 (金)
真狩村立真狩小学校 × 長谷川 仁 (美術家)

ニセコ町 (1)
2006 年 1 月 22 日 (月)〜2 月 2 日 (金)
ニセコ町立ニセコ小学校 × 磯崎 道佳 (彫刻家)

豊浦町 (1)
2006 年 11 月 7 日 (火)〜11 月 17 日 (金)・20 日 (月)
豊浦町立大岸小学校 & 鉱山分校 × 磯崎 道佳 (彫刻家)

大樹町 (1)
2010 年 10 月 25 日 (月)〜11 月 5 日 (金)
大樹町立大樹小学校 × 荒川 寿彦 (太鼓奏者)

中札内村 (1)
2011 年 11 月 21 日 (月)〜12 月 2 日 (金)
中札内村立中札内小学校 × 遠藤 一郎 (未来芸術家)

松前町 (1)
2010 年 9 月 27 日 (月)〜28 日 (火)
松前町立松城小学校 × 石川 直樹 (写真家)

様似町 (1)
2013 年 7 月 29 日 (月)〜8 月 3 日 (土)
様似町立様似中学校 × 長谷川 仁 (美術家)

士幌町 (6)
2006 年 12 月 4 日 (月)〜12 月 15 日 (金)
士幌町立北中音更小学校 × ルカ ローマ (彫刻家)

2007 年 8 月 27 日 (月)〜9 月 7 日 (金)
士幌町立佐倉小学校 × ルカ ローマ (彫刻家)

2007 年 10 月 1 日 (月)〜10 月 12 日 (金)
士幌町立北中音更小学校 × 荒川 寿彦 (太鼓奏者)

2008 年 7 月 23 日 (水)〜8 月 1 日 (金)
士幌町立佐倉小学校 × 磯崎 道佳 (彫刻家)

2008 年 10 月 6 日 (月)〜10 月 17 日 (金)
士幌町立北中音更小学校 × 平原 慎太郎 (ダンサー)

2009 年 8 月 24 日 (月)〜9 月 11 日 (金)
士幌町立北中音更小学校 × タノタイガ (現代美術家)

帯広市 (4)
2005 年 1 月 24 日 (月)〜2 月 4 日 (金)
帯広市立大正小学校 × KOSUGE 1-16(美術家)

2006 年 2 月 6 日 (月)〜2 月 10 日 (金)
帯広市立花園小学校 × 杉浦 圭太 (俳優)

2006 年 2 月 18 日 (土)
帯広市立大正小学校 × クニ 河内 (音楽家 / 作曲家)
& 野田 美佳 (音楽家 / 打楽器奏者)

2007 年 9 月 18 日 (火)〜9 月 28 日 (金)
帯広市立広陽小学校 × anti-cool(パフォーマー)

大空町 (1)
2013 年 11 月 21 日 (木)〜22 日 (金)
大空町立豊住小学校 × 石川 直樹 (写真家)

斜里町 (1)
2014 年 7 月 14 日 (月)〜15 日 (火)
斜里町立朱円小学校 × 石川 直樹 (写真家)

清里町 (1)
2017 年 12 月 14 日（木）、15 日（金）
清里町立清里中学校 × 石川 直樹 (写真家)

羅臼町 (1)
2017 年 8 月 22 日 (火)〜8 月 27 日 (日)
義務教育学校知床ウトロ学校 × アサダワタル (音楽家、文筆家)

標津町 (1)
2017 年 1 月 11 日（水）、1 月 12 日（木）
標津町生涯学習センターあすぱる × 石川 直樹 (写真家)

中標津町 (1)
2014 年 8 月 8 日 (金)〜16 日 (土)
斜里町立西竹小学校 × 長谷川 仁 (美術家)

音更町 (2)
2005 年 8 月 22 日 (土)〜8 月 26 日 (月)
音更町立音更小学校 × ゴウヤスノリ (ワークショップ・プランナー)
& 松本 力 (映像アニメーションアーティスト)

2008 年 9 月 1 日 (月)〜12 日 (金)
音更町立東士狩小学校 × wah(参加型表現活動集団)

幕別町 (1)
2007 年 2 月 20 日 (火)〜3 月 2 日 (金)
幕別町立途別小学校 × 祭太郎 (パフォーマー)

浦幌町 (2)
2009 年 10 月 26 日 (月)〜11 月 6 日 (金)
浦幌町厚内小学校 × 石川 直樹 (写真家)

2011 年 9 月 20 日 (火)、21 日 (水)、11 月 23 日 (水)〜25 日 (金)
浦幌町立厚内小学校 × 石川 直樹 (写真家)

札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2017

主催：おとどけアート実行委員会
共催：sapporo2 project
支援：札幌市
コーディネート：一般社団法人AISプランニング
後援：札幌市教育委員会
協力：さっぽろ天神山アートスタジオ
　　札幌市立拓北小学校、札幌市立有明小学校
　　札幌市立山の手小学校、札幌市立澄川南小学校
　　小林義治（拓北小）、新内香奈（拓北小）
　　嵯峨治彦（有明小）

※ 本事業は「第三次札幌市新まちづくり計画」の一環として企画・実施されております
※ 札幌市立澄川南小学校での活動はさっぽろ天神山アートスタジオ主催
　国際公募事業【s(k)now】の一環として開催

札幌アーティスト・イン・スクール事業

おとどけアート2017記録集

発行：おとどけアート実行委員会
寄稿：川上りえ
協力：札幌市立拓北小学校、札幌市立有明小学校
　　札幌市立山の手小学校、札幌市立澄川南小学校
企画・編集：一般社団法人AISプランニング

活動スタッフ随時募集中！

おとどけアートをもっと知りたい、活動に関わりたいという学生や一般の方々を対象に活動スタッフの募集を行っています。事前準備や打合せから関わりたい方から、小学校での活動に参加したい方まで、幅広く募集をしております。実際の活動だけでなく、おとどけアートに関する説明なども行っております。一緒に活動を盛り上げたい、興味・関心がある方はぜひご連絡ください。

お問い合わせ

おとどけアート実行委員会 事務局　一般社団法人AISプランニング（アイス）
〒064-0811北海道札幌市中央区南11条西7丁目3-18
TEL：011-596-6726　FAX：011-596-6727　E-mail：info@ais-p.jp　HP：http://ais-p.jp/
事務局担当: 小林 亮太郎　TEL: 070-5288-5367　E-mail: ryotaro@ais-p.jp

過去の活動はブログからご覧いただけます。http://inschool.exblog.jp/ 又は「おとどけアート」で検索！